

朝が来ていた。英一は兼輔と共に詰所に戻り、そこで大人しく、しかし不安そうに待っていてくれた二人と再会した。英一の腕の中でぐったりと息絶えたままの初佳を見た奏美と累は人目もはばからず泣くことしか出来なかった。

二人の気持ちが落ち着いて漸く、横にされた初佳の遺体をどうするかと云うことと兼輔についての話となった。累にとつては初対面であり少し不安そうに彼を見やったものだが、英一と奏美が信頼している様子を見て幾分そうした気持ちも和らいだらしかった。

「ま、そりゃこんなところで赤の他人をすぐ信じろつては無理だろうよ。ただ、そのねーちゃんの遺体の埋葬についてはいい場所がある」

彼がそう言って立ち上がったので三人が少し怪訝そうな顔をした。兼輔は努めて笑って続ける。

「この部屋のすぐ傍の十字路を北に進むと城の中庭に通じてるんだ。中庭つつつても殆ど枯れちまつてるけどな。でも掘れる土はあるから少なくとも埋葬ぐらいはしてやれるだろう」

「あそこそうなつてたんですか。でも、昨日調べた時は閉まってましたけど」

「暫く前やつと教授と合流して三階からどうにか降りてやって、内側から掛かってた鍵を開けたんだ。何で内側から掛かったのかは知らねえけどさ」

「そうだったんですか。でも、何故中庭に行く理由があつたんです？」

「そりゃやお前らに時空間転移マシンの話してなかったっけか」

「あ、それは友達から聞きました」

「へえ、そりゃ話が早い！　ともかく今までは無理矢理三階から上り下りするしかなかったんだが教授が中庭の鍵を見付けてくれたんで、漸くあそこにあるマシンの修理に本格的に着手出来そうつてなつてるんだ。で、ものは相談なんだが」

「えーと……俺たちにその手伝いをして欲しい、とか」

「御明察だ」

話がまとまり、四人は初佳の遺体と共に中庭に移動した。その中庭に入って英一と奏美は仰天した。

「月子ちゃん！」

「あ……奏美、英一……」

月子と紹、それに常人の三人が初老ぐらいの男性を囲んで話をしていた。英一たちを見た月子は直ぐに駆け寄った。

「無事で良かった」

「……」

この月子の素直な安堵に英一と奏美はお互い顔を見合わせ、月子を直視しかねた。……どこことなくそのセーラー服に汚れや皺が目立つのはここまでの苦労の反映であろうと、二人はどうにも素直に信じられなかった。二人はあの携帯電話の着信を思い出さずにはおかれなかった。同時に向こうでこちらをじっと見ている紹と常人の存在に不気味さを感じずにもおかれぬのだった。それに今、英一は初佳の遺体を抱え上げている。それを無視してまず二人の健在に安堵すると云うのは……。

「どうしたの？」

「あ、いや……何でもないよ。なあ、奏美」

「う、うん。心配かけてごめんね月子ちゃん」

「そう……」

月子のその反応からは真実を測りかねた。いや、たとえあの電話の向こう側で起こっていたことが二人の想像通りのものだったとしてもそれを肯定する要素など見出されぬ方が良いのだ。仮にその様なことを彼女に質せばそれ自体が侮辱に他ならぬであろうから。二人は努めて表情を取り繕った。

「なあお前ら、それ……十慧先輩か？」

おもむろに紹がそう言つて近付いて来た。常人もゆるりと近付いて来る。これに微かに奏美がびくついたが紹にしろ常人にしろ見ていなかったかの様に反応しなかった。月子も初佳に視線を移し、一瞬だけ顔を顰めた。英一はゆっくりと地面に遺体を下ろした。

「ああ。……甫土先輩に、殺された」

「まじでか。ま、こんなクソみたいな場所じゃあの人だってイカれもするか」

「オレあ甫土先輩のことあんま詳しくないツスけど、殺す程つてのは流石にどうかしてますよね」

何故だか紹や常人のこの感想はいやに冷酷に響いた様に英一には思われた。いやむしろこの二人、一年生である常人にさえ存在感の大きかった元部長である初佳がこうして死んでいると云う事実に対して冷静過ぎると云う風にしか映らなかった。だがそこで更に英一にしろ奏美にしろ思うのは、この冷静さすらもあの電話口のやり取りを思い返すとむしろおかしい程大人しいものに思われた。その死を悲しみ悼む、と云う常識的な反応も、ただ故人が不条理な環境下で案の定に果てたことに対し小馬鹿にすると云う態度のどちらも取らない、やけに静かで、あたかも既に内省なりは済ませたが故に必要以上の言を口にすべきでないとも思っているかのような客観的態度。二人にはあらゆる方面からこの男子二人に地下通路で見た偽者たちとはまた別口の異質さしか覚えられなかった。

「あの、瑚潑先輩……それだけですか？」

「何が？」

「もつとこう……十慧先輩に、十慧先輩の為に言うことが、あるんじゃないですか？　那於巴君も？」

累の指摘にも二人は動じなかった。沈黙が不気味に流れた。彼らが更に口を開くことを恐れた様に奏美が言った。

「るいちゃん、わたしたちはずっと訳の分からないことや悲しいことに直面してばっかりだから……二人も沢山大変な目に遭つて、疲れてる筈だから……」

「いえ……でも……」

「あー、瀬之川さん悪いね、氣い使わせちゃつて。確かに大変な目に遭いまくつたねえ……」

「全くですねえ……本当に何だつてこんなところに迷い込まされたのやらつてモンですよ」

遠い目をして紹と常人は言った。英一は累をそれとなく二人から引き離して彼女に耳打ちした。

「飛井さん、あの二人に千ヶ嶽のことは何も言うんじゃないぞ」

「え？」

「多分だけど二人は千ヶ嶽のこと、恨んでるから」

きわめて真剣な目でそう言われて累は少し困惑した様に英一を見上げはしたが、言葉なく頷いた。振り返って見ると初老の男の方も面々に歩いて来ていた。

「霧海さんたちから大体は聞いているよ。改めて私が嘉尾健、N大学の教授をやっている。と云つて、体感で半年も世間から行方不明になっていれば研究室も解体されているかもしれないがね」

冗談めかしつつも彼はそう言い、まずは亡くなった子を安らげるようにしてやろうと伝えた。この中庭には兼輔の言つた通り元々あった草花の大方は枯れ、土の上には枯草ばかりと云う具合になっていた。その中で端に井戸があり、井戸から少し離れたところに謎めいた乗り物らしきものが鎮座してあった。あれが時空間転移マシンとやらなのであろう。それ以外と云うとぼつぼつとある枯れ木以外は目立つものはない。適当なところに穴を掘つてやれば簡便ながら埋葬はしてやれるだろう。英一たちはその作業に取り掛かる。

「ああ、坊之威君、霧海さんたち三人を連れてマシンの方の調査と整備を進めてくれんか。今ある部品は向こうに積んであるから」

「あ、はい、分かりました」

健がそう指示を与えて彼らが離れる。それに英一たちがきよんとしていると、真面目な顔をした健が三人を集めた。彼は小声で尋ねた。

「君が確か……葦杜君だったかね、葦杜英一。それにそちらのお嬢さんが瀬之川……奏美さんでよかったか」

「あ、はい。こっちは後輩の飛井累です」

「その、よろしく願います」

「ん。……君たち三人は向こうの連中、霧海君たちについてどれ位知っている？」

「どれ位知っているって……俺は、あいつとは幼稚園からの仲で」

「では……彼女の態度が繕っているものであると、感じるか？」

「！」

「私は赤の他人ゆえ安易に尋ねる訳にも行かん。しかし最初にあの三人と会った時はもう少し余裕と云うか年齢相応の臆病さと懸命さがあったものだ。だが先頃再会出来た時には今の、どうにも不安になる態度になっておった」

「その……英一くんとわたし、向こうの城壁の上で一回会えたんですけど、何か分けて欲しいって言われた時に何もしてあげられなくて……」

「そうだったんですか……」

「……それから何が起こったのかは彼らのみぞ知る、か。ともかく分かった、あちらの三人はなるべく私の方で気に掛けておこう」

「え、それは、大丈夫なんですか？」

「湖の方では多少助けになってやれたつもりだからな。私の感触だが、瑚潑君と那於巴君は私の言うところなら信じてくれている様に思う」

「そうですか……。その、月子ちゃ、霧海さんは教授さんを信用してくれてるんでしょうか？」

「さて、霧海君は今のところ誰に対しても誠実には感じるが……しかし今のどこか張り詰めている具合はやはり気に掛かるところだな。ともかく分かった、ではまず為すべきところを済ませてしまおう」

どこで手に入れたかトタン板らしきものを健は地面に差し込んでスコップ代わりに使い始めた。小春の時は素手で掘らざるを得なかったが故に墓穴は浅く、盛り土をして形ばかり埋めるしかなかったものだ。その差は殆ど無意味にも等しいだろうが、少しでもましなものを掘って、初佳と云う人が安らげることを英一たちは願わずにはおかれなかった。

健の説明によると時空間転移マシンとやらは次のようなものと云う。この自動車の胴体を改造したと思しき胡散臭い物は曰く、元々アメリカ合衆国の片田舎に住んでいた偏屈者の自称科学者が人生を懸けて打ち込んでいた時間遡行研究の結実として開発されたものであり、当人はその処女航海でこの城に不運にも漂着し暫く一帯を彷徨った末に果てたと見られる。その手記の断片を彼はこれまで収集し、漂着の衝撃によって幾つかの部品が破損ないし紛失に至っていることが分かっていると云う。

ただ健の見立てでは衝撃による破損は最小限であり部品自体が盗難された様に失われているが故に駆動しないと云うことで、それらを回収し適切に組み直すことが出来れば再稼働可能ではないかと考えられている。乗り物としては精々二人乗り程度の代物でこそあるが、ある程度の人数を一遍に運ぶ方法については彼に考えがあると云う。

「尤も、これらとて開発者が我々の如き門外漢から見ても完全なものを完成させていたならばの話だが。それでもあてもなくこの城の周辺を彷徨ったところで恐らく元いたところへは帰れまい。駄目で元々と云う、試す位はいいだろうよ」

確かに頭から信じろと云うには荒唐無稽の方が勝る話ではあるだろうと英一たちにも思われた。時空間転移って何だよ、と考えずにはおかれまいところだ。しかし事実として自分たちはこの謎めいた城の周辺に迷い込み、散々謎の怪物共に命を脅かされ既に犠牲者まで出ている。水も食糧も限られ過ぎており長く保つ筈がなく、可能性に縋る程度の代物であっても試している方が差し当たり気が紛れることは違いなかった。

それから面々は食事を摂った。健は月子たちと東の湖周辺で貯蔵庫らしき場所を発見していたらしく、そこから持ち出すことに成功した食糧等をこの中庭まで兼輔と共に運び込んでいた。缶詰類の様な保存食ばかりとは云え、そうしたものを大人二人は分け隔てなくこの場に集っている顔触れに配給してやった。紹や常人の様子を英一は盗み見て、確かにこの二人は健に対して接している時はどこかひりついた様な雰囲気か鳴りを潜めて従順に、或いは齢相応の素直さを示している様に思われた。

「ねえ英一」

奏美、累と車座になって缶詰をつついてたところへ月子が歩いて来た。今のその様子からは何も彼女から異様さの類は伺えない。英一も敢えて何か藪から蛇をつつき出す様な真似はしたいとは思っておらず、微かに緊張しつつも彼女を見上げた。

「どうしたんだ？」

「二人は……いえ、楚さんと名賀搗さんがいない上に十慧先輩が亡くなったことを思うと何もなかったなんて言えないわね」

「楚さんは化け物に連れ去られてどうなっているのか分からない。小春、ちゃんは……」

「……いい、言わなくて。誰も犠牲にならずに済めばよかったとは思うけど、そもそも最初に委員長がやられてるもの、十慧先輩や名賀搗さんでなくともそうなる可能性があった」

「月子ちゃん……」

「えーと、霧海先輩？ 先輩の方はどうだったんです、誰かいたりしませんでした？」

「私が高に見たのは独りで離れて行ってしまった千ヶ嶽さんと私を行かせる為に囹を買って出てくれた正雁先輩だけよ。それ以外は残念ながら」

「あー……月子、悪い報告だけど……」

「……」

「……千ヶ嶽は死んだ。あの《捕食者》って化け物に喰われた。この飛井さんが一緒に逃げて来たんだけど、助けられなかった」

「……そう。せめて安らかであって欲しいわね。我が儘な部活仲間ではあったけど、それが死んでいい理由になりはしないもの」

伏し目に月子はそう言った。これに累は見知った月子と云う人物を感じたのだが、英一と奏美は微かに違和感と云うか、足りないと思う感触を覚えた。少しだけ淡々と事実を受け止めすぎていると云う印象。もう少し悲しそうにしている彼女なら不思議はないだろうと。それ故か、奏美が遠慮がちに尋ねる。

「月子ちゃん、その……そっちは、何も無かった？」

「何もって、何が？」

「えっと……何て言ったらいいかな、ほら、一回、瑚潑くんが月子ちゃんのスマホを借りて電話して来たことがあったでしょ？」

「……ああ、それね」

納得した様に、落ち着いて月子は頷いた。彼女は微かな笑みを浮かべて奏美と目線を合わせる様に屈み込んで続ける。

「あれはね、瑚潑君にしろ那於巴君にしろ散々化け物に追い回されて精神的にやつれてた時で、でもどう云う訳かあの時英一と通話出来そうだったから貸したのよ。私はその時みんな隠れてた部屋の

扉を化け物が押し開けようとしてたのに気付いたから抑えてたの。二人が手伝ってくれなかったから確かに大変だったけど、やり過ごせたんだから別に気にしてないわ」

「う、うん……でも、何の為に貸したの？」

「二人とも気休めが欲しかったんだと思うわ。あなたたちに助けを求めるには道がなかった以上無理だもの、精々愚痴を聞いてくれる相手がいて欲しかったんじゃないかしら。弱音を吐いてもとは思うけど、二人も辛い目に遭って来たものね」

「月子ちゃんは辛い目に……遭ってないなんて、そんなことはないの？」

「ないわよ？ いや、あくまで相対的にはだけどね。千ヶ嶽さんと喧嘩してからあの二人は良いことがなかったから。でも私はあの子とは友達のもりだったし、こんなこともあるだろう位に思ってたわ。楽なことなんてなかったとは云え、二人程の心労はしてない筈よ」

「……」

奏美は明らかに納得していない風だった。英一にしてもそうだった。……この月子は本物だろう。本人で間違いないだろう。だが決定的に二人の知るそれまでの月子と同じとは言えない何か異様な変質を二人は感じていた。この応答にしてもそうだった。それは二人に何も心配させまい、何も余計な心配事を報せまいと云う月子の配慮の行き着いた最果てに他ならぬのではないか。この女は確かに三人の中にあつては調整役の様な立ち位置を自ら買って出る方だが、もう少し愚痴っぽかったり不平をこぼし、英一と奏美が至らぬところにしようがないなあと呆れつつ手を差し伸べる様な、そう云う優しさを持った少女であつたのだが。この場にある彼女にはどこかそうした親しみやすい美質が欠缺をきたし、何かそれを覆い隠す為の無機的な仮面を被っているかに思われたのだった。だが二人はそれを指摘しかねた。或いはその友情が、或いは遠慮が、また或いは……自分たちの認識が彼女を穢す下劣なものではないかと云う懷疑によつて。

健は月子たちと共にマシンの保守と修理を続行する。代わりに英一が奏美、累、それに兼輔を伴つて更なる探索に出掛けることとなつた。目下のところ地下一階の貯蔵庫と思しき部屋と三階から北へ続く階段を登つた先にある宮殿の様な区画は鍵が掛かつていた為に調査が入っていないと云う。また同じく三階から登れる尖塔も後回しにされていたと。なら登つて確かめてみるしかないか、と云うことになった。見込みは薄いだろうがその中で由海を探し出すことが出来ればよいのだが、と英一は不安を抱きながらも思う。

三階へ上つた四人は尖塔とその構造を瞥見した。この三階より四本が立ち並び、上で渡り廊下によつて連結されているらしい。四人は手近な北西の塔より扉を開いた。錆び付いたそれはあまり円滑に開かなかつたが、少なくとも開けるだけましなものだ。わざわざ元に戻すのも手間であるとして扉をそのままに四人は登り始めた。螺旋階段には所々に窓が備わつて外の景観を眺め下ろせる。と云つて、相変わらず陰気で不可思議な空模様と廃墟の城下、それを取り囲む森と山ばかりしか見えもしないのだが。

四階は目立つたものがないただの渡り廊下である様に思われた。尖塔の外に出て見回すが、これと云つて目を惹くと言えるものは見出されない。精々誰とも知れぬ朽ちた屍が転がっているばかりだった。吹き抜けの渡り廊下へ吹き付ける風は凜いできて沈黙を促すかのように静かだった。

「とすると、五階の方が何かありそうな感じだな」

兼輔が上を見上げながらそう言う。五階は幾分広い構造を取っていることが下からも分かり、或いはより物見櫓としての役目が強く与えられていると云うことにもなるだろう。四人は尖塔に戻つて、周囲を警戒しながら階段を登る。静かな、暗い内部。足音だけが響くことにも英一たちは慣れたものではあるが、地下通路の経験上暗い場所から何が寄つて来るか知れたものではないが故に最後尾を守る英一と先頭を歩く兼輔は気を抜くつもりにはなれなかった。

五階に達し、階段が途切れて扉が目の前に映る。兼輔がこれに手を掛けたが、思う様に開かない。「もしかしてここ、鍵掛かってます?」

「面倒臭えな……ちょっと下がってろ」

三人に言った兼輔は少し下がって、助走を付けて体当たりを掛けた。大きな音を立てた扉はその拍子で何かが折れる音がし、そのまま開いてしまった。

「わ、凄い。壊せるって分かってたんです?」

「確信はなかったけど、扉の隅から光がこぼれてたから、ボロだなと思ってさ」

たたらを踏みながらも体を払った兼輔がそう言って少し笑った。……四人は出口から外へ出、辺りを見回したが景色は四階のそれより地上が遠くなった程度だった。しかしこの五階には中央に施設らしき区画があったので、兼輔が累を伴ってそちらを調べることにし英一と奏美はこの五階を一周して目ぼしいものを探すこととなった。二人はまず東に抜け、如何にも弓兵がここから下を射るのだとも云う風に設けられたトーチカを覗き込んだがやはり風雨と歳月の経過以外に見出し得るものはない。こんなことばかりだな、と思いつつ南側を見た時、奏美が叫んだ。

「あ、あれ! 何か吊り下げられてる!」

言うが早いか奏美が駆け出し、英一もそれを追って南側へ赴いた。南側には北側と違って増設されたような床板が伸びており、それはドラマか何かでありそうな罪人をここから突き落として処刑するためのものである様に思われた。近付くにつれ吊り下げられたものが何なのかはつきりし、二人は驚いた。

「楚さん、何であんなところに!？」

由海はその床板の先に得体の知れない黒い糸の様なもので四肢を覆う様に巻かれて吊り下げられていた。助けに行こうとした奏美だが床板には手すり一つついておらず危険な為に英一がこれを制して、張り付く様にして慎重に彼がこれを進んだ。騒ぎを聞きつけた兼輔と累も南側の扉から出て来て状況を把握したが、目下彼らには出来ることなく英一に任せるしかなかった。その英一は先端部まで達し、下との距離に内心肝を冷やしつつも由海を覗き込む。気を失っているのか呼吸はしているが反応がない。

「こりゃ下手に起こしたら却って厄介だぞ」

英一はそう呟きながら床板の先端部に括り付けられた糸の様なものに手を付ける。感触はどこかじめめとして、糸と云うより蔦である様に思われた。ともかくその強度さえ保てば引き上げることは可能だと彼は信じ、糸を引っ張ろうと括り付けられた部分の下に手を伸ばす。

「駄目ですよお葦杜君、私は疲れて眠っているんです。そんな乱暴なことをして起こしちゃ」

由海の声が彼の背後から聞こえた。英一はぎょっとして振り返る。彼の背後にはいつのまにか黒い靄を伴う由海の様なもの姿が現れていた。奏美や累が怯えの悲鳴を漏らし、兼輔が二人を庇いながらも手をこまねいている。何というタイミングの悪いところで現れてくれたことか!

「おっ、お前は、由海じゃない、邪魔をするな」

「どっちが本物だなんてどこに根拠があるものでしょう、葦杜君? さ、私から手を引いて、こっちに来て。私、ずっとあなたを待ってたんだもの」

「やめろ……近づくな!」

何の緊張も躊躇いもなく由海の似姿は床板を歩く。その度にずしりと音がし、揺れて英一に恐怖を、向こうで待つ三人に焦燥を与えた。このままではまずいと思ったらしい兼輔がハンマーを投擲する姿勢を取ったが、外せば終わり、仮にこの化け物に当たったとしても貫通して英一にでも当たったなら取り返しが付かなくなる恐れから実行に移せず固まっていた。

上げた。

「やめろおーっ！っ！！」

その拍子で彼は脚を回して由海の似姿に蹴りを入れた。横倒しになる様にそれは宙へ傾ぐ。しかしその拍子に英一も体勢を崩して転がり落ち、咄嗟に伸ばした手が床板を掴んでいなければそのまま転落していただろう。腕力と握力だけで宙吊りに耐える彼に、わしりとその胴体に腕がしがみ付いた。

「葦杜君……どうせ死ぬなら、あなたと一緒がいいわ……」

「うわああああああっ」

振りほどこうともがく英一を嘲笑うような由海の似姿は彼を恐慌に追いやりつつあったが、最早万策尽きかけているかに思われた。……ブン、と何かが飛ぶ音がし、これが由海の似姿に直撃した。兼輔が遂に投げたハンマーが英一の背中に組み付いていたそれに当たり、吹き飛ばされる。由海の似姿は痛がるのではなく不満げな顔をし、しかしにと邪悪に笑みを浮かべた。

「ん……あれ……私、は……」

縛められていた由海が寝言も付かぬ目覚めの言葉を漏らし、その意識が覚醒した。正にその由海に似姿は飛ばされた拍子にしがみ付いた。英一も他の三人も目を見開いた。あまりにも理不尽にさえ思われたのだから。似姿は邪悪な笑みのままに、その片手を空に上げ、その手刀を以て由海を繋いでいた糸を薙いだ。殆ど音もせずそれは切れたのを四人は見た。

「えっ？ あ、きやああああああああっ！？」

由海の悲鳴は瞬く間に小さくなっていった。その悲鳴に被さる様に彼女と同じ声をした者の囁い声がかどました様に思われた。……下から小さな音がした。それが何なのかを考えることはこの場の誰にとつても御免蒙りたいことだった。殆ど皆茫然としていたものの、英一だけはその上でそろそろ腕も握力も限界が近付きつつあるのを悟り、必死になって登ろうとした。彼が力を込めて這い上がろうとする程に床板が反動で揺らぎ、余りにもそれは理不尽な努力を強いられているかにも思われたが、我に返った兼輔がそんな彼にやはり振り落とされたりせぬよう慎重にだが近付いて英一を支え、辛うじて事なきを得た。狭い足場を漸く脱した二人は、しかし崩れ落ちて涙を流す奏美と言葉もなく立ち尽くす累の姿を見てただ自分たちの無力に打ちひしがれるほかなかった。

いつまでも凹んでいても始まらない、と殊更語気を強めて兼輔が言い、面々を建物の中に押し込んだ。この五階の構造は櫓としての外側及びトーチカに囲まれた区画があり、その中には南北を通す通路と二つの部屋があった。しかし西側の部屋は鍵が掛かっており開かず、適当に体当たりしても崩せるものではないことが分かっていた。それで四人は東側の部屋を調べた。中には然程荒らされた形跡のない幾つかの多段ベッド、それに机や椅子が散在していた。ここも兵員の詰所ないしは兵舎と云うところであろうか。

「あの、先輩。これ」

沈んだ印象は拭えないままの累が棚から見つけたらしいものを差し出した。一本の鍵だった。

「ああ……。でも、どこの鍵だろうな」

「鍵の掛かったところに手当たり次第差し込んでみるしかないだろうな」

これ以外特段のものは見つからず、後味の悪い心境のままに四人は五階を後にした。恐らく中庭で作業をしていた面々にもあの音は聞こえていただろう。より近く、はっきりと。また由海の断末魔の悲鳴も。

「やっと再会出来たと思ったのに、こんなの……こんなの……」

奏美が顔を覆って泣きながらそうこぼした。次々と友達が死んで行くのを目の当たりにして心が耐えかねているのが浮き彫りのその姿はあまりに痛々しかったが、助けられなかった英一、何も出来なかった累には掛ける言葉もなかった。……だしぬけに兼輔が言った。

「前に言ったっけな。研究室の他の仲間はみんな死んだって。俺の目の前でも何人か死んだよ。助けてって、言われたよ。でもな、生き延びるのが精一杯だった。教授だって同じさ。みんな助けたかったけど、無理だった。……だから、生き延びるしかないんだよ。どんなに辛くても耐えて、耐えて、何とか助かる為に。そうしないと死んでいった連中のことを覚えている奴さえいなくなるだろ。せめてあいつらが死んだことを伝えるべき相手に伝える為に、死ぬるか。そう思っとけよ」

どこか男臭い理屈だった。奏美は泣き止まなかった。しかし兼輔もそれを叱らず、それ以上は何も言わずにただ前に立って先導した。三階まで降りる暗い尖塔の螺旋階段は彼らの心情にいたく冷酷であった。……伝えるべきこと、か。英一はその言で思い出す。由海が伝えて来た気持ち。それに対する答えをあの場合では彼女も保留を許したが、結果的に何も示す機会に至らぬまま永別となった。己の不誠実をこそ彼は呪詛せねばならないのではないかとも思われるのだが、そんな沈んだ雰囲気の間を見たらしい兼輔がばんと力強くその肩を叩いた。笑ってこそいないが、元氣を出せと態度で示している。英一は少しだけ上を向いた。そして心の中で由海の死に対し、何か少しでも報いるものがあつて欲しいと、安らかな眠りぐらいはあつて欲しいと願ったのだった。

一階に降りた面々は一度中庭の月子たちに報告へと戻った。当然と云うべきか、彼女らも由海の最期のことを知っており、痛ましい顔をする健、やはり伏し目に俯く月子、どこか分かつていた様な顔をする紹と常人の姿を垣間見るようになった。

「しかし鍵の掛かっている部屋と云うとどれでしたっけね？」

「幾つかある筈だが、一階北側の通路に面している大きな部屋があつてそこは見る限り食堂であつた様に思える。もし二階の構造が一階と似ているなら、扉の配置と云い、二階にある同じ部屋に何かあるかもしれんぞ。あそこは確か鍵が掛かっていた筈だ」

健がそう指摘したので英一たちはこれに従い二階へ上り直す。現在休憩所扱いされている一階正門西の詰所の反対側、東の詰所も鍵が掛かっていた筈であることを奏美が思い出して言及したが、対称構造を取っているなら中にあるのも西のそれと同じ様なものだろうと云う点がこれまた思い出される様に英一から言及される。それを鑑みると敢えて優先する意味は薄いものと見られ、後回しとなった。

二階のその部屋は持ってきた鍵をして開いた。中を覗き込んだ英一たちは誰もいないことを確かめ、そこを調べ始める。歳月によって褪せ切った机や棚、抽斗が立ち並びかすれた文字が記された書類が散乱する部屋だった。兼輔が立てられたままの万年筆を見て呟く。

「ここは俺たちで言うところの事務室ってところなのかな」

差し当たり、その見解に回答を示す者はいないが英一たちは恐らくそうなのだろうと思った。一階の食堂等もそうだったが、この部屋からは中庭を眺め下ろす窓が設けられている。採光の意味でも備えられたそれのお陰で部屋は外の光に照らされてどんよりとはしていたが暗くない。風漬しの探索には好条件だった。

「これは……？」

英一は机の引き出しの中から鍵束を見つけた。野晒しでなかったからか状態は比較的良さそうに見える。彼は部屋にいる他の顔触れを集めてそれを見せた。

「いいな。これでもう少し調べられる範囲が広がりそうだ。足りなくなっている部品がその中で見つかるといいんだが」

兼輔がそう言った直後、空が不穩に澱んだ様に思われた。英一たちは窓からまず空を見上げ、次に下から悲鳴を聞いた。中庭に残っていた面々のど真ん中に《哄笑する女》がぬっと現れたのが英一たちにも見えた。

「英一くん……！」

「ああ、これは……」



自分たちも身を隠さねば、と考えたところで背中から悪寒が走った。ぱつと振り向いた時、彼らの背後から黒い血溜まりの様なものが床に広がり始め、そこからずぶずぶと音を立てて《黒い人型》が現れようとしていた。

「逃げろ、今すぐ!」

兼輔が叫ぶと共に四人は一目散に部屋の出口へと走り出した。英一と奏美は東の出口、兼輔と累は西の出口へ。意図した訳ではないが、二手に分かれた彼らに対し《黒い人型》は英一の方を見た。それには彼も焦りを覚えたものだ。奏美の手を放すまいと握り締めて彼は廊下の東側から南へ走った。一旦外壁のベランダ側に抜け、その角に隠れて追跡者の様子を窺う。《黒い人型》はどこか悠々とした足取りをして追って来ていた。このままでは出くわすと思った英一は奏美を連れて更に西へ走る。西へ走った時、累と百香を助けようとして巻き付けたロープが目に残った。彼は城壁の下を見た。ロープは半ば辺りで千切れているが、この高さなら恐らく降りられるだろう。その下に茂みが見えたので、英一は素早く奏美にロープを指さして目を向けた。奏美は正確に彼の言わんとするところを汲み取って、高さを恐れる暇もなくこれを伝って降り始めた。英一もそれに続いて降りる。下を見た奏美は一瞬だけ躊躇いを覚えたらしかったが、《黒い人型》に対する恐怖の方が勝って飛び降りた。しかし運動神経に格差のある奏美だからか、着地に失敗し転んでしまう。焦りながらも英一は続いて飛び降り、奏美を助け起こしながら目を付けていた茂みに隠れた。その上から悪寒の主が近付き、暫く周囲を見回す様に歩き回っていたが、ふと気付いた様にロープの掛けられている箇所近付き、その下を覗き見た。二人はただ自分たちが向こうから見えていないこと、気付かれていないことを切実に祈った。……数十秒ばかりの沈黙が漂い、気配は西へと通り過ぎて行った。

英一は奏美を顧みた。痛そうな顔をしている。命にこそ別状はないが足を怪我したらしい。

「英一くん、あなたはお城に戻る方法を探して。わたしはここで暫く休んでるから」

「いや、こんなところで奏美を放ってなんかおけないだろう」

「ここでじっとしているだけじゃ時間の無駄だから……。大丈夫、門から月子ちゃんたちに必要なことは伝えられるよ」

気丈そうな笑顔を奏美は浮かべた。状況が悪い方に転びすぎて大人しい彼女も少し胆力が付いたのかもしれない。英一は尚も渋りはしたが、奏美が折れないのを見て根負けし立ち上がった。しかし、どこをどう調べろと云うのだろうか。彼としては頭を抱えたかった。このまま階段を下りて廃市街の方へ向かってても何が得られたものか。そう考え、この城の城壁際を調べることにした。彼はまず東に向かって歩き、罅の入っている箇所でもないか探した。この期に及んで持っている鋸をして穴を穿てる訳ではあるまいが、何らか入れる箇所を探し出さねばそれこそ徒労である。英一は城壁に沿って東の角に達し、北へ進む。枯れ木だの植え込みだのを除けば斜面しか見えない一帯を進んでいると、ふと何か声が聞こえた。

「なー瑚潑センパイ。葦杜先輩たちのこと、どう思う?」

それは常人の声だった。既に危機は去ったのか、あまり緊張感は感じられない。むしろどこか間延びした、無気力にも聞こえる呼びかけに答えた相手も淡々としたものだ。つた。

「葦杜のこと? ……正直言うと何かさあ、ムカつくんだよな。今この時に至ってもどっかさ、いつも通りって感じがしねー?」

「あー、分かります分かります。何なんでしょうね、あの余裕な感じ。全然平気って云うか、普通って云うか、マトモ過ぎって感じ」

「名賀搗さんや十慧先輩、それに楚さんが死ぬとこみんな見て来たらしいのにまだ良い子ぶれるだけの余裕あんの、ずりーわ」

「ほんとにですよねえ、女子ばっか周りに侍らせて心にヨユーがあるんでしょうかね」

「さあ、知らねーな。……ツネヒーお前、あいつに嫉妬してんの?」

「嫉妬ですかあ？ オレ、学園でそんなに女子に嫌われるようなキモい振る舞いしてたつもりありませんよ？ 結構モテてると思ってるんだけどなあ」

「部内じゃテキストに使われてるじゃん」

「あはは、ま、それは必要経費ってところですって」

「ふーん。じゃ何でわざわざ聞いたのさ？」

「いやー……もしかしたら、殺したいと思ってたりするのかなと思って」

「……」

「一応言っときますけど、オレは殺しは反対ですよ。恨みがあるでもないのにそこまでしたらもう最低だ、落ちるところまで落ちる」

「恨みって言うとき、あんだだけ手前勝手しやがった千ヶ嶽に仕返ししそこねたままじゃん俺ら。やっぱ溜まってんだな」

「いやー……そりゃ、こんな風に散々化け物の殺意にぶち当てられてて、ストレス溜まらない方がおかしいツスよ」

「ああ、そりゃ全く。……あとツネヒー、恨みがないってのは、嘘じゃね？」

「？」

「だってあいつ、おれらが助けて欲しいって頼んだのに、断りやがったじゃん。それがおれらに対する仕打ちかよ、おれらが何したってんだ？」

「……そう云えばそうでしたっけ。んだからあんな風に余裕なのかな」

「……霧海さんさあ、どこ逃げたんだろね？」

「どこでしようねえ、まだ追っかけ回されてこの部屋に逃げ込んで来たりするのかな？」

「したら……ハハ……」

「いやまあ……流石に止めときましようよ。嘉尾さんにバレたらどうなるか分かりませんって」

「確かになあ、あのおっさんにや流石に義理があっから。おっさんのやってることで本当に帰れるとは正直思わないけど、ぼーっとしてても気が滅入るだけだしな」

「駄目だったら……」

「……いや、そいつはその時に考えようや。万が一、そのまた万が一ぐらいに本当に帰れると今は信じておこうぜ」

「……そっすね」

二人は壁の外側にいる英一が存在に気付かぬまま一通り喋って、後はただ疲れた様に沈黙を保った。……その気怠さ、その無造作に垂れ下がった暴力性。理性の箍など最早必要としていないのを義理ないしお体裁だけが辛うじて抑制せしめている心情。知ってはならぬことを知ったような気が英一にはされてならなかった。彼は努めて風が吹くのを待ち、その音に紛れるようにゆっくりと移動して傍の壁面を離れた。彼らの悪意に中てられては己の心も何か恐ろしいものに蝕まれ行く様に思われてならなかった。薄々分かつてはいたが、英一はなるべくそれを信じない様にしていたものだった。彼らの絶望と自棄的な感情を。